

Newsletter

2019年（令和元年）9月15日発行

2019年（令和元年）

11月例会

日時：11月16日（土）14時より

会場：大妻女子大学千代田キャンパスH棟313教室

①講師：二松学舎大学 足立元

題目：裏切られた漫画

—八島太郎のプロレタリア美術とグラフィック・ノベル—

司会：都留文科大学 中地幸

②講師：都留文科大学 野口哲也

題目：明治期における写実思想の展開に関する一考察

—生人形へのまなざしを起点として—

司会：武蔵大学（名誉教授） 私市保彦

12月例会

日時：12月21日（土）14時より

会場：大妻女子大学千代田キャンパスH棟313教室

①講師：青山学院大学（非常勤） 岡本さだこ

題目：リチャード・ライトの俳句世界—自然界の中の「実存」—

司会：清泉女子大学 有光隆司

②シリーズ《比較文学の方法》④

自由討論「越境の門前で見えるもの」

司会：日本比較文学会会長 ソートン不破直子（日本女子大学名誉教授）日本比較文学会東京支部長 佐藤宗子（千葉大学）

ディスカッサント：参加者一同

2020年（令和2年）

1月例会

日時：1月25日（土）14時より

会場：東京大学駒場キャンパス18号館4階コラボレーションルーム1

①講師：早稲田大学（招聘研究員） 大西由紀

題目：柴田環をめぐる報道と、日本におけるオペラ黎明期の
“プリマ・ドンナ”表象について

②講師：早稲田大学（招聘研究員） 千森幹子

題目：日英『ガリヴァー旅行記』図像の系譜と変遷

司会：日本大学 椎名正博※①②ともに

3月例会 特別企画

日時：3月21日（土）14時より

会場：東京大学駒場キャンパス18号館4階コラボレーションルーム1

講師：丸善雄松堂株式会社 代表取締役社長 矢野正也

題目：丸善150年の歴史を洋書輸入業者の立場から振り返って

司会：東海大学 堀啓子

INSIDE THIS ISSUE

1. 11月・12月・1月・3月例会案内
- 2-3. 例会会場案内
- 4-7. 例会要旨等
8. 東京支部短信

懇親会のお知らせ

12月例会終了後、懇親会を予定しています。

詳細は12月初めに支部ホームページに掲載しますので、皆さまふるってご参加ください。

幹事会開催のお知らせ

第2回幹事会：

10月19日（土）11時より、東海大学高輪キャンパス4号館3階4305教室にて開催します。

第3回幹事会：

2020年3月21日（土）

2020年3月例会後、例会会場にて開催します。

（幹事会構成員は、幹事、支部長、事務局長、各種委員会委員長、会計、会計監査です）

役員連絡会のお知らせ

2019年11月、および2020年1月は例会終了後、3月は13時より、例会会場にて開催します。

（役員連絡会の構成員は支部長、事務局長、会計を含む事務局委員、各種委員会委員長です。委員会の委員、幹事は含まれませんが、陪席を歓迎します）

※ 印刷版のNewsletterでは、12月例会司会の有光隆司先生の肩書に誤記がありました。正しくは上記の通りです。お詫びして訂正いたします。（東京支部事務局）

11・12月例会会場

大妻女子大学千代田キャンパス

H棟313教室

〒102-8357

東京都千代田区三番町12番地

◆都営新宿線、東京メトロ有楽町線・南北線

「市ヶ谷」駅A3出口、徒歩10分

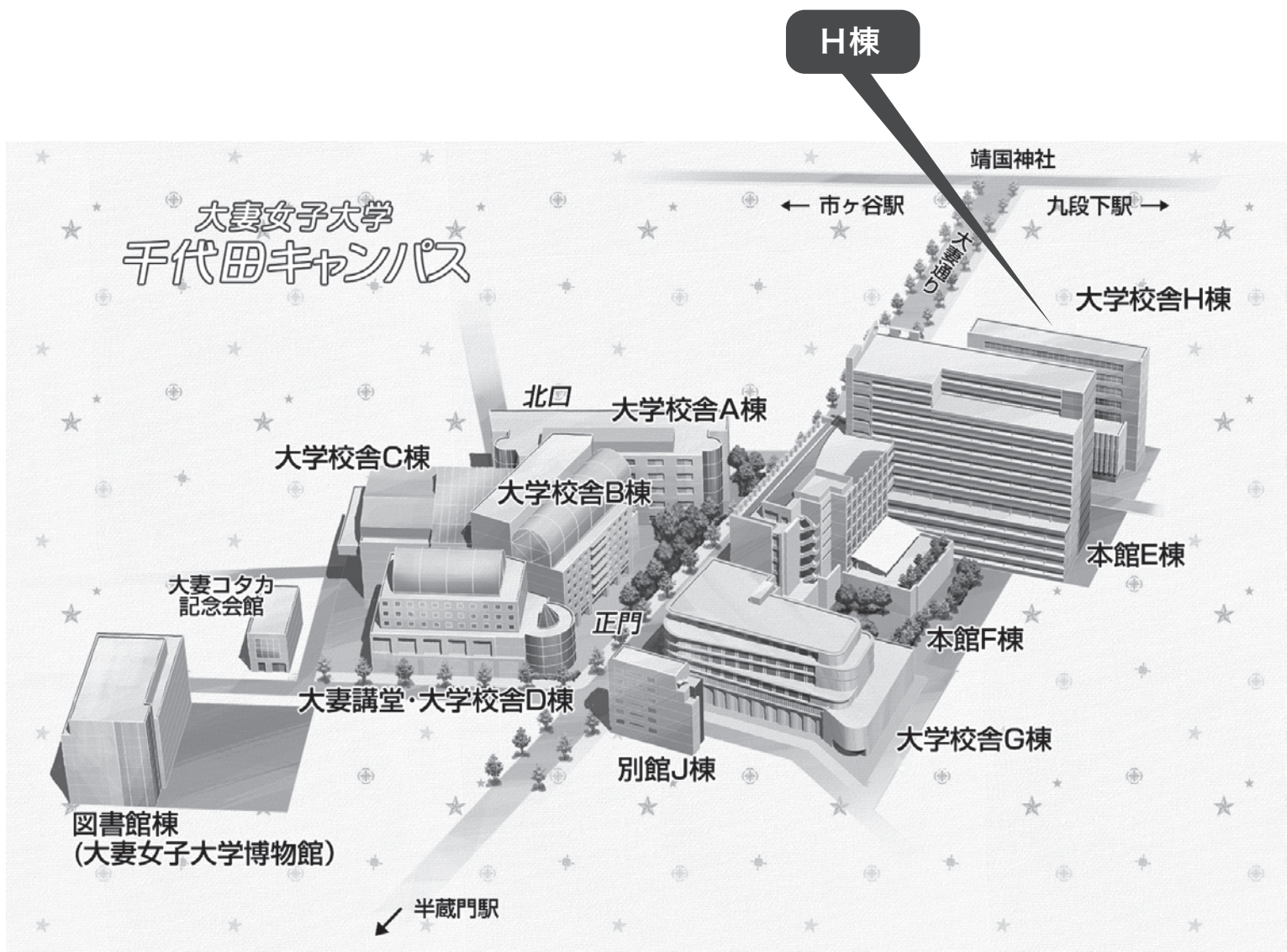
◆JR総武線「市ヶ谷」駅、徒歩10分

◆東京メトロ半蔵門線

「半蔵門」駅5番出口、徒歩5分

◆東京メトロ東西線

「九段下」駅2番出口、徒歩12分



1・3月例会会場

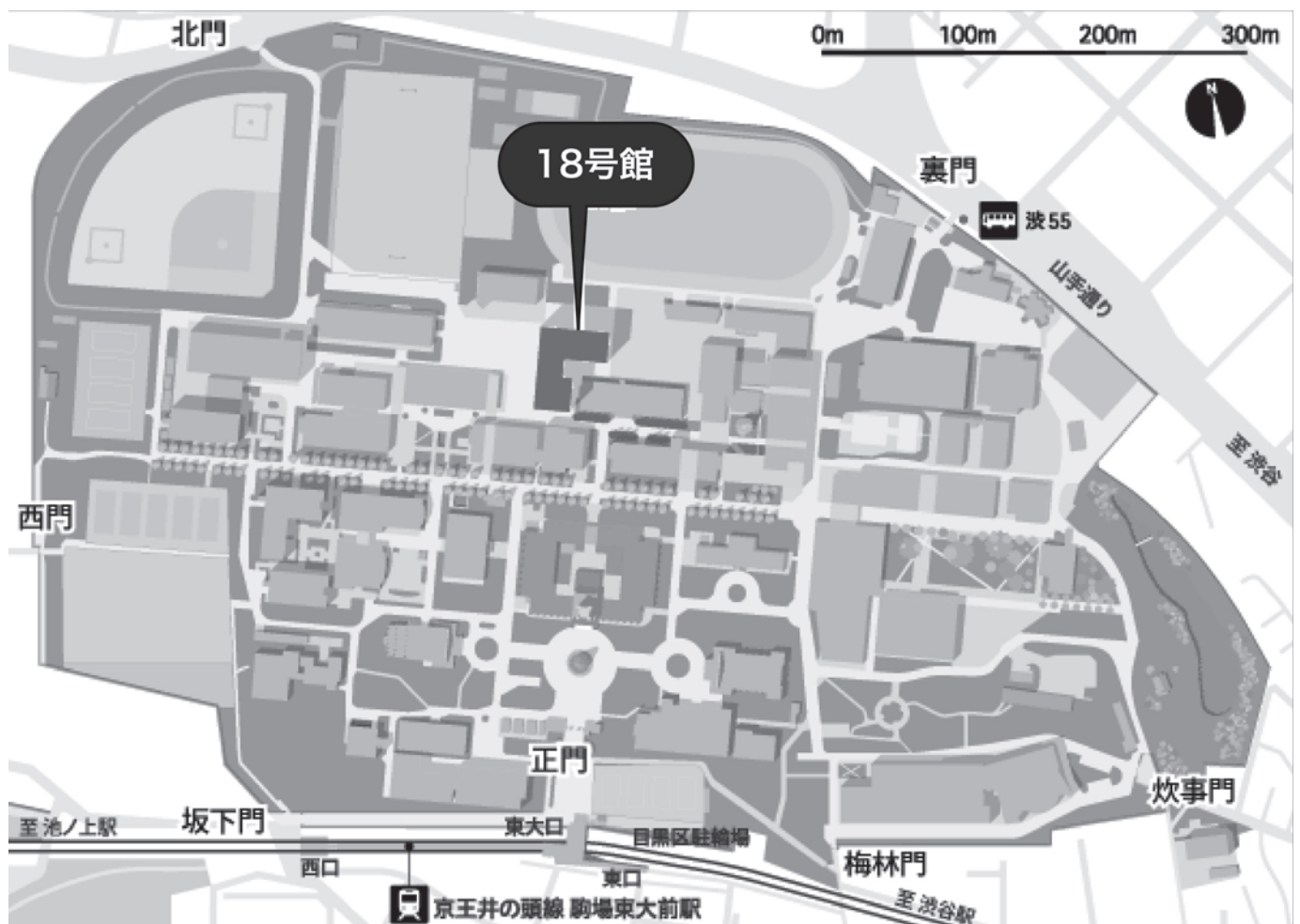
東京大学

駒場キャンパス18号館4階
コラボレーションルーム1

〒153-8902

東京都目黒区駒場3-8-1

◆京王井の頭線「駒場東大前」駅下車



11月例会発表要旨

裏切られた漫画

―八島太郎のプロレタリア美術とグラフィック・ノベル―

二松学舎大学 足立元

戦後のアメリカで活躍した絵本作家の八島太郎（1908-1994）は、かつて渡米前には岩松淳と称して 1930 年前後のプロレタリア美術運動に深く関わっていた。彼は、1943 年にアメリカでグラフィック・ノベル形式の自叙伝 *The New Sun*（『あたらしい太陽』）を発表し、敵国日本にも圧政に立ち向かう個人がいることを示して高い評価を得た。

本発表では、①プロレタリア美術運動における八島の漫画作品と発言を掘り起こし、②戦時中以降のアメリカで八島が綴った自叙伝と比較し、③戦後に隠された（語られなかった）事柄を明らかにする。

八島についての先行研究としては、ノンフィクション作家の宇佐美承が数多くの関係者に取材した浩瀚な伝記を著し、その後にもいくつかの詳細な評伝などがある。だが、そもそもプロレタリア美術運動の作品や資料については、これまで十分な研究がなかった。そのため、渡米前後の彼の作品の質的变化さえ、論じられてこなかった。

本発表では、八島が後に捨てることになったプロレタリア美術の漫画表現に注目する。そこに見られる猥褻さや泥臭さは、絵本作家としては否定すべき若気の至りかもしれないが、時代を体現する表現として決して無価値なものではない。

そして渡米後の八島が漫画ではなくグラフィック・ノベルで自叙伝 (*The New Sun*) を著したことは、結果的に様々な意味でのズレを生んだといえる。個人史や歴史との齟齬があったばかりではない。言語、国家、イデオロギーからの遊離もあった。これらのズレは、固有のリアリティの欠如をもたらしたかもしれないが、ある種の普遍性にもつながったのではないだろうか。そこに、八島の絵本が持つ魅力の鍵もあるとも考えられる。

明治期における写実思想の展開に関する一考察

―生人形へのまなざしを起点として―

都留文科大学 野口哲也

近代文学の初発期のあり方について、旧来の読本や戯作に代わる小説の理念として、人情や風俗の「模写」という方法を中心に据えたことが革新をもたらしたという単純な進化論に疑問が付されて既に久しい。また、言文一致運動と軌を一にして「内面」や「風景」が倒錯的に成立したという議論も、前近代に遡って見直されつつある。このような研究動向は、幕末明治（19 世紀後半）の文学言説の実態が、西洋からもたらされた新しい思想と江戸時代までの在来の遺産とが複雑に絡み合って再編成された翻訳的な空間であったことを示しているが、同時期に近代的な制度として確立されていった美術ジャンルの周縁で興味深い消長を示した造形芸術^{いきにんぎょう}に、生人形がある。

安政から明治半ばまでの約 30 年間にわたって見世物興行で用いられた生人形は、その名が示すとおり人間の生の姿や感情を迫真的に表現した等身大の木彫像である。廃仏毀釈運動や神仏分離政策の影響で技術的転身を図った仏師の手による、写実を極めたこの造形に関しては、近年の美術史研究で光があてられた松本喜三郎(1825-91)や安本亀八(初代、1826-1900)といった名人が知られるが、オールコックやシュリーマン、エミール・ギメといった訪日外国人もその仕事に驚きをもって注目したほか、高村光雲と光太郎には対照的な印象を残したことも指摘されている。生人形という造形そのものは博覧会の展示装置へと移行したのち、その一部は裸体画論争にも巻きこまれながら、写真や映画など新しい娯楽の登場によって衰退していくが、一方では明治後期には活人画という虚実が交差する別のパフォーマンスが流行したことは、いかなる文脈において捉え得るのかという問題もある。

本発表では、こうした生人形という特異な歴史的ジャンルに対して向けられた様々なまなざしを整理しながら、明治期の文学と造形における写実的方法の内実や形成過程を見直すための展望を得たいと考えている。

12月例会発表要旨

リチャード・ライトの俳句世界

—自然界の中の「実存」—

青山学院大学（非常勤） 岡本さだこ

リチャード・ライト（Richard Wright 1908-60）は、代表作『アメリカの息子』（Native Son）等の小説を通して、人種差別への怒りや抑圧された人間の心理と行動を表現した作家である。後半生はパリに在住し、ヨーロッパやアフリカの作家や哲学者とも交流し、『アウトサイダー』（outsider）等の実存主義小説を発表、更に、国際的な視点を通して植民地政策等を批判する評論を書き続けた。このように、終生、主體的に生きる自由を求めて闘い続けたライトであったが、最晩年の1959年に俳句に出会い、病床にありながら数か月のうちに4,000句を創作するに至った。

ライトは、R.H. プライス（R.H. Blyth 1898-1964）の『俳句』四巻を読み、俳句の技法や精神を学んだとされるが、『俳句』には、背景となる東洋思想や詩歌、芭蕉、蕪村、一茶など主に江戸俳諧の鑑賞、俳句の技法に至るまで広範囲にわたる鑑賞や解説が記されている。

ライトのハイクには、繊細な自然描写と共に人々や動物の日々の情景が描かれているが、彼のハイク世界は美しい情景のみを描いたユートピアではなく、むしろ、鋭い視点を通して現実の一齣が切り取られている句も数多い。例えば、肺病に苦しむ老人や桶に浮かぶネズミの死体などが描かれ、生者の孤独感が鏤められてもいる。しかしながら、写實的に小さく弱い存在を描写しながらも、彼の小説に表現される「自分の自由のための殺人」といった他者との激しい対立は見られない。彼のハイク世界の調和した穏やかな印象は、無常ながらも有機的な自然界に繋がり、存在しているという事実に一因が求められるのではないだろうか。

ライトの俳句の遺稿の題に、“This Other World”という言葉が含まれていた。本発表では、彼のハイクと小説における自然描写の比較、また、プライスが掲げた俳句の要素の内、「孤独」「具象性」「諧謔」等の点に焦点を当てながら、ライトが求めた「別の世界」について論じていきたい。

※ 印刷版のNewsletterでは、岡本さだこ先生の発表要旨に誤記がありました。正しくは上記の通りです。お詫びして訂正いたします。（東京支部事務局）

シリーズ《比較文学の方法》④

自由討論「越境の門前で見えるもの」

司会：日本比較文学会会長 ソートン不破直子（日本女子大学名誉教授）
日本比較文学会東京支部長 佐藤宗子（千葉大学）
ディスカッサント：参加者一同

東京支部ではこれまで3回にわたってシリーズ《比較文学の方法》と題した比較文学研究の方法論をめぐる、支部会員による講演を開催してきました。

今日、比較文学研究は、国・地域・言語を越え、画像、映像、音楽など多様な媒体・ジャンルの間を往還し、哲学、思想、宗教、心理学、社会学、歴史学など既成の知の体系を自在に横断して、文学テキストと非文学テキスト、高級文化と大衆文化との伝統的区分を問い直しつつ、その領域を日々拡大しているといえます。しかしこうした現状が一方で、比較文学研究のディシプリンの拡散をもたらしたとも言えなくもありません。さらに、比較文学研究の根本的な学問姿勢・方法が「越境」にあることは言うまでもありませんが、今日、その越境すべき境界線が、ますます自明の、確定したものではなくなりつつあるという現実があります。歴史的、政治的、文化的、言語的に多重に構築され、また書き換えられていく境界線をいかに把握するのも、今日の比較文学研究に課せられた大きな課題です。

シリーズ《比較文学の方法》④にあたる今回は、特定の講演者に限定せず、ご出席の東京支部の皆様への「比較文学」のディシプリンに関する率直なお考え、疑問、反論などを自由に発言、討論していただきたいと思います。司会の二人はその盛り立て役、交通整理を務める所存です。年末のひととき、思いのたけを語り合いましょう。

1 月例会発表要旨

柴田環をめぐる報道と、日本におけるオペラ黎明期の “プリマ・ドンナ”表象について

早稲田大学（招聘研究員） 大西由紀

明治 44（1911）年に開場した帝国劇場は、日本の劇場としては初めて、自前の声楽家と管弦楽団を抱えて、歌劇の恒常的上演を目指した。その最初の3つの作品、『胡蝶の舞』（1911年10月）、『熊野』（1912年2月）、『釈迦』（同年6月）に主演した柴田環（のちの三浦環、1884～1946年）はさしずめ、日本初の座付きのプリマ・ドンナということになる。

環は東京音楽学校在学中から、自転車通学の姿が新聞の話題となっていた。卒業後は母校に奉職したが、最初の夫との離婚と次の恋の噂がメディアを賑わせたために職を辞することになる。その後に参加した帝劇では、共演者らとの衝突や、作品での役柄や衣装が、常に辛辣な調子で報じられた。そんな中、明治 45（1912）年 7 月に環は突如出奔し、洋行する。帝劇の舞台に立ったのはわずか 1 年ほどであった。

同時代の報道において環は、わがままで気位が高く、恋愛に積極的で、家庭的なことに縁のない、きわめてステレオタイプ化された“プリマ・ドンナ”として描かれている。しかし、日本初のプリマ・ドンナである環が、すでにステレオタイプ化されたイメージによって語られているというのは、どういうわけなのだろうか。

“プリマ・ドンナ”に関する同様のイメージは欧米圏にも見られ、そうした表象の発生と展開については近年、文化史や女性表象の観点から研究が進んでいる。日本の場合は、欧米での“プリマ・ドンナ”表象がそのまま輸入されたのか、あるいは独自の要素が加味されているのかを、まずは検討する必要があるであろう。

本発表では、環をめぐる報道のほか、声楽家の登場する同時代の文学・演劇作品（とりわけ、サルドウ『ラ・トスカ』に基づく複数の翻案作品）にも注目し、東京音楽学校の風紀問題などの同時代の文脈も踏まえて、日本における通俗的な“プリマ・ドンナ”像の形成の背景にあったものを明らかにしたい。

日英『ガリヴァー旅行記』図像の系譜と変遷

早稲田大学（招聘研究員） 千森幹子

ジョナサン・スウィフト（Jonathan Swift, 1667-1745）の『ガリヴァー旅行記』（*Travels into Several Remote Nations of the World*, 1726）の初版には挿絵は掲載されていない。しかし、翌年に出版されたイギリス版にはすでに挿絵が添えられ、その後、多くの英版図像が出版された。

新帝国主義政策により英国の植民地が拡大しオリエントへの関心が高まるにつれて、英版『ガリヴァー』図像には、日本・中国・イスラム圏にまたがるオリエンタリズム的表象が出現する。一方、英国で再版された仏版図像には、ジャポニズムの痕跡が色濃く残る。また、日本版図像では当初の西洋図版の模倣を脱した独創的な挿絵が、子ども用の翻訳を中心に、描かれるようになる。

本発表では、こうした、英仏の主要な挿絵画家による日本表象と中国表象に焦点をあてて、その足跡をたどるとともに、『ガリヴァー旅行記』の日本語翻訳・翻案を飾った明治から昭和初期の挿絵画家の作品にみる日本文化への融合の軌跡と、それぞれの画家による独自の解釈を、子ども用の翻訳を中心に、考察したいと考える。

具体的に取り上げる西洋版挿絵画家は、J.J. グランヴィル（1838 年出版：仏）、T. モートン（1864）、アーサー・ラッカム（1900, 1909）、V. アルマン・ボワソン（1884：仏）ウィリー・ボガニー（1919）など。日本版の図像は、明治期の筒井年峰（1899）、さらに、大正期の童画家である初山滋（1920-1921）、清水良雄・深澤省三（1920）、岡本帰一（1921）、昭和初期の本田庄太郎（1929）。さらに、従来の研究ではほとんど論じられていない武井武雄の数種の『ガリヴァー旅行記』挿絵についても、言及する予定である。

3 月 例 会 講 演 要 旨

《特別企画》

丸善150年の歴史を洋書輸入業者の立場から振り返って

丸善雄松堂株式会社 代表取締役社長 矢野正也

司会 東海大学 堀啓子

丸善は明治2年（1869年）の創業以来、2019年の1月1日で150周年を迎えました。創業者は早矢仕有、天保8年の生まれです。江戸時代の終わりに当時既に医者でしたが、慶應義塾の福澤諭吉のもとで学び直し慶應で英学や経済を学んだ後、明治という新しい時代の幕開けとともに横浜に福澤の助言を得て「丸屋商社」を創業します。当初は、医薬品や医学書、福澤諭吉の著書などの販売を始め、さらに洋書の輸入を手がけます。爾来、西洋の書籍輸入の窓口として、150年にわたって西洋の知識や文化を日本に紹介してきました。

丸善と近代の英文学者、作家に関わるエピソードはあげればきりがありません。夏目漱石の『吾輩は猫である』の一節に、猫の飼い主の苦沙弥先生が丸善で多量に本を買うため、月々の支払いに困ったとありますが、それはもちろん漱石の実像で、尾崎紅葉が亡くなる3か月前に『ブリタニカ』を買って行った話、日本橋店二階洋書売場が、夏目漱石、芥川龍之介、田山花袋、その他多くの作家、研究者に「丸善の二階」と呼ばれた文化サロンのような存在であったことはあまりに有名です。また、先生方になじみの深いタイプライターや丸善インキなどの文房具を扱ってきたことも見逃せないでしょう。

また国内最古の企業PR誌「學鐙」は、明治35年に内田魯庵を編集長として迎え入ってから幅広い文化人に寄稿いただき、現在なお120年以上にわたって発行を継続しています。

私ども従業員はまた、研究者や作家の希望にこたえようと「選び、探し、届ける」ことに熱意をもってあたってきました。それは大正期の店員の日記からも窺うことができます。150年にわたって洋書輸入業に情熱をもって取り組んできた弊社の歴史を語ります。

東京支部長に就任して

佐藤宗子

この4年間支部をひっぱってきてくださったソーントン不破直子先生の後を受け、東京支部長に就任した。これまで例会や大会に顔を出したり幹事会に出席したりはしてきたが、今は戸惑いしつつもさまざまな助言を戴き、何とか出発したところである。

幹事としての過去2年間の見聞でいえば、東京支部はいくつかの課題を抱えているように思う。各役員の負担軽減と活動の活性化は、その中でも意識すべきことといえる。長年活動を支えてきた層が定年退職を迎える一方、中堅は本務の多忙の度合いが増し、若手はなかなか安定したポストを得にくいのが、いずこの学会でも最近の状態となっている。そんな中で、幸い、支部活動の経験豊かな方や新たに任についた方が、各委員会や幹事会の仕事を引き受けてくださった。

全体として新しい活力を得られるよう努めながら、いろいろな見直しや合理化もできるだけ図りつつ、なるべく多くの会員が主体的に関わっていけるような方向を探る——そんなことを念頭におき、新任の堀啓子事務局長とともに、皆さんのお力を借りつつ、歩を進めていくことにしたい。

〈訃報〉 高山茂氏(日本大学)

2019年6月10日、東京支部会計監査の高山茂先生が逝去されました(享年72歳)。ご専門は比較芸能。2017年6月より東京支部会計監査を務められ、任期を全うされる直前のご他界でした。謹んでご冥福をお祈りいたします。

電子版『日本比較文学会東京支部研究報告』への投稿について

電子版『日本比較文学会東京支部研究報告』は、原則として毎年一回、11月末日に発行されます。研究論文投稿資格を有する者は、本学会員で、前年および前々年に開催された東京支部例会または東京支部大会において研究発表や講演を行った者としてします。投稿論文の提出期間は8月16日から8月31日まで送付先は下記の通りです。

日本比較文学会東京支部編集委員会委員長 椎名正博(shiina@chs.nihon-u.ac.jp) 詳しい投稿規定および執筆要領、投稿用のテンプレートは東京支部ホームページに掲載されていますので、どうぞご覧ください。

ご質問がある方は支部事務局に電子メールでお問い合わせください。

月例会発表者募集

支部月例会の発表者を募集しています。申し込みは支部事務局(hikakubungakutokyo@gmail.com)に氏名、所属、題目、連絡先(メールアドレス、電話)を明記したうえで、600～800字の要旨を添えて電子メールで送信、または郵送でお願いいたします。支部役員に託されても結構です。発表時間は45分(質疑応答を除く)です。

日本比較文学会東京支部ニュースレター126号

発行人：佐藤宗子

編集委員会(編集担当)

委員長：椎名正博

委員：鈴木美穂 高柳聡子 永井久美子 堀江秀史 安元隆子

事務局(発送担当)

事務局長：堀啓子

事務局委員：川野礼音 小泉泉 土田久美子 南平かおり

芳賀理彦 畑中健二 蒔田裕美 森本真一

JCLA

日本比較文学会東京支部

事務局住所

〒259-1292

神奈川県平塚市北金目4-1-1

東海大学 文化社会学部 文芸創作学科

堀啓子研究室

TEL: 0463-58-1211 (内線3275)